

無料サンプルのダウンロードありがとうございます。

アンソロジーの各作品の冒頭を読むことができます。

アンソロジー テーマ『出逢い』

- | | | |
|---|----------------|--------|
| 1 | 「彼の迂遠なるプロローグ」 | 糸公 |
| 2 | 「やまびこは山の声」 | 小林 悠理 |
| 3 | 「ボーイ・ミーツ・ヘンナノ」 | 小林 昴平 |
| 4 | 「振り下ろされなかつた手斧」 | 五島 夏樹 |
| 5 | 「リ・インカネーション」 | 仲野 識 |
| 6 | 「ヴィーナス・ヴィーナス」 | 古池 真透 |
| 7 | 「きつと運命の人」 | 三カ月 一月 |

イラスト ミヤバイム
50音順

彼の迂遠なるプロローグ

糸公

暖炉の薪が火の粉を散らして爆ぜた。

ログハウス風の古めかしい店内はその日一番の繁盛も過ぎ去って静まり返る。夕焼け色の照明に照らされながら、いつもより芳醇な茶葉とコーヒーの余香が漂っていた。

「それじゃあ杉山さん、お先に失礼します！」

窓際の日溜まり、カウンターの脇に位置する一席で僕はじっと息を潜めていた。食器棚と観葉植物の鉢に挟まれてそこは異様に狭苦しい。

「はい。お疲れ、×××ちゃん」

名前を呼ばれた彼女の首もとで赤いマフラーの尾が跳ねる。振り返ると暖炉の火に照り映えた黒髪が弧を描く。

「明日も午前から入るので、よろしくお願いします！」

そう言っただけは勢い良く頭を下げる。

その装いはなぜだか休日ですら制服で、何よりもそのよく通る声が印象的な少女だった。頭の中に長く澄んで響き渡る。

「いつも助かるわあ。帰り道、気をつけてね」

「はいっ、ありがとうございます！ ではまた！」

マスターに送り出された彼女の足音が遠ざかっていく。耳を澄ませているとそれは重たい扉に打ち切られた。

「……で、いつまでそこでそうしてるわけ？」

視線を感じて食器棚の陰から慎重に顔を覗かせる。

「もう帰りましたよね？」

「あんたがそこでへたれてる間にね」

呆れた、とでも言いたげに肩を竦めるのは身長一九〇センチ超の筋骨隆々とした巨漢である。……と僕は思っているが、実のところマスターの性別は本人以外の誰も知らない。

「じゃ、僕も出るんで」

頭を引っ込めると、テーブルに広げっぱなしの参考書を掻き集めてカバンにしまい込んだ。

「あああはいはい、いつものね……」

眉間を指で揉みほぐすマスターの脇を通り抜けようとすると呼び止められる。

「ちょっと待ちなさいよ」

「何ですか？ 見ての通り、僕は急いで……」

「今のままじゃどうせ無駄足でしょう？」

ぐ、と足踏みを繰り返していた僕はその場につんのめる。

「悪いこと言わないから私を頼んなさいよ。そうすればこんなまどろっこしいことしなくても……」
マスターの言いたいことはよく分かる。よく分かるけれど。

「お代はここに置いてくんで！」

カウンターのコイントレイにコーヒー三杯分の代金を残して店を飛び出す。マスターの止めどない溜め息が扉の内側に閉じ込められた。

「うう……さぶっ」

顔面に雪の混じった寒風が吹き付ける。埃臭くて生温い店内とは打って変わり、澄み渡る冷気は吸い込んだ途端に鼻腔をじくじくと痛めつけて吐き出せば口から白く棚引いた。

凍える冬空から舞い落ちた牡丹雪が見窄らしい住宅街を灰色に染め上げていく。

「ええと、彼女は——」

その住家は地区の東端、喫茶店からは向かって左方向に位置していた、はずだが。

「——やっぱりこっちはじゃないよな」

そちらの方角に彼女を見つけられず、反対方向に目を向ければ降り注ぐ雪の垂れ幕の向こうにコート姿の背中を見出す。

制服に防寒具、という出で立ちには僕と変わらないものの、彼女の足取りは乱れも迷いもしない。その消えかけた足跡を追って僕も雪道に踏み出した。

「今晚はどこへ行くのやら」

いつも通りならばこれから表通りに出て、最寄りのコンビニに立ち寄る。その入口の傍らでくたびれ果てた公衆電話から連絡を取るのが普段の流れである。

案の定、その日も雪道を超えてコンビニ前の公衆電話に向かっていった。その後ろ姿から目を離し、物陰にある近くの自販機を物色しているとストラックスのポケットが震える。

「ええとはい、もしもし」

「昨今は絶滅しかけのストレート式ケータイを耳に当てた。」

『首尾はどうなの？』

「マスター、家電からかけるときは始めに名乗って欲しいっていつも言ってますよね？」

「喫茶店の固定式電話は常連客から公衆電話のような扱いを受けている。おかげで通話相手がマスターだとは限らない。『どうせあんたにかけるのなんて私だけでしょ？』

「それも、その通りではあるのだが。」

「始めに名前を伝えるのって、電話だとか初対面の相手には欠かせない挨拶だと思いませんか？」

『そうね。それさえできずにストーキングしてるなんて悲惨なもの』

「誰の話をしてるんだか。」

「で、何の用ですか？ まさか僕をからかうのが目的だなんて言いませんよね？」

『さっさと声をかけなさいよ』

「マスターは何の前触れもなくそう切り出した。」

『まだ後ろから見つめてるだけなんですよ？ あんたを見てるとやきもきするの！ いい加減勝負に出なさいよ！』

「苛立たしげな、それでもマスターらしい後押しが耳朶に叩きつけられた。気圧され、そしてそれ以上に心を揺り動かされながらも鼻で笑って見せる。」

「何度も言いますが、人の評価は第一印象、出会いの一瞬が全てを決めるんです」

『ああ……また始まったわよ、いつものが』

「あからさまな溜め息をつかれるが僕は怯まない。」

「いいですか、よく聞いて下さい。僕だって何も一目惚れされたいわけじゃない」

「せめて魅力的な……そう、例えば恋愛対象になり得る異性の一人として彼女の目に映るようになりたかった。そのために僕はたった一度の好機を掴み取ろうと、それがなせるだけの状況を待ちわびて彼女のあとを尾けているのだった。」

「……たとえ、そのせいでマスターからストーカー呼ばわりされていても。」

やまびこは山の声

小林
悠理

「私、絶景に出会いたい！」

河西由美は昼休みの高校の屋上から、目をきらきらに輝かせながら大きな声でそう叫んだ。一瞬周りがぎよつとしたけれど、なんだまた河西かと言わんばかりにみんなは昼食へと戻っていく。

「どこか旅行に行きたいってこと？」

「違うよ。山に登りたいんだ！」

「山？」

私たちは今、高生三年生なのだが受験で大変なこの時期に山に登りたいとはまた酔狂な。普段から趣味で山登りをしていくのならまだわかるけど、由美にそんな趣味があるなんて聞いたことがなかった。

「昨日テレビでお笑い芸人が必死に山を登っててね、山頂の景色に感動してたんだ。私ももちろん感動したんだけど、自分の足で険しい山道を登って画面越しじゃない山頂の景色を見れば、もっと感動できると思うんだよ」

若干理由がミーハーだけど、高校生活の中で親友と二人で山登りをしたという思い出は案外悪くないなと思ったので、私はそれに同意した。

「じゃあどのぐらいの高さの山に登る？」

「エベレスト！」

ネパール政府の許可がいるし、高地順応したシェルパを雇わなきゃいけないし、登山料だけで百万円以上かかる。

「じゃあ富士山！」

何合目から登るかを決めてきちんと計画を立てれば不可能じゃないかもしれないけれど、登山初心者でいきなり富士山はやめておいた方がいいと思う。今回は初めてなんだし、もっと近場の山にしておいて、登山にはまってもっと登りたいと思った時は富士山に登るといい、と私は由美を窘める。

「わかりましたー」

じゃあじゃあ、と由美はスマホで近場の山を検索しては私に見せてくる。それも高い山から順番に検索してるようだった。本当は全部突っぱねて、遠足で登るような山を選びたかったのだが、由美は絶景に出会いたいのだ。なのであまり低過ぎる

山だと良くないし、綺麗に舗装され過ぎている山も違うなと思った。

私たちは結局昼休みいっぱい話し合っ「扇状岳」という山に登ることにした。標高は素人が登るにはやや高く、道も舗装されている所もあれば、獣道もあるという具合だ。

ちなみに扇状岳の名前の由来は山裾が扇形に広がっているかららしい。私はこれを読んだ時、だいたい山裾は扇形に広がるだろうと思ったのだが、この扇状岳はほんの少しだけ変わった山だった。山裾の片方が扇形に広がり、もう片方は切り立った断崖になっているらしい。

私たちが登るのは少し危険だと思ったのだが、単純な話、切り立った断崖から登らなければあまり関係ないのだ。私たちはおとなしく扇形の方から山を登ろう。

それに切り立った断崖の方はクライミングスポットとして人気らしい。カラビナやハーネスを使ってやるあれだ。もしかすると今回のことがきっかけで由美が登山にはまって、いずれクライミングスポットの方を利用する日もあるかもしれない。そう思うと、くすつと笑えた。

「どうしたの？」

「いや、由美が将来アルピニストになっちゃうんじゃないかと思って」

「やめてよ。私は地動説を唱えないよ」

地動説を唱えたのは、アルピニストではなくコペルニクスだ。

ボーイ・ミーツ・ヘンナノ

小林 昂平

11月下旬。肌寒さが加速し始める一方で、世間が『あのイベント』に向けて熱気を持ち始めるなんと矛盾したこの時分、俺は仕事帰りの道を一人歩いていた。

何処から運ばれてきて誰が金を出して準備したのかもよく知らない、イルミネーションとやりに魅了されている名も知らぬ人々。そんな人込みを掻き分けながら俺はぼつりと一言

「今年もご苦労様です」

と皮肉を込めて呟いた。平たく言えば、クリスマスが近づく事に胸を躍らせている人々に対し盛大に僻んだのだ。

己の行為が負け犬の遠吠えであると自覚しながらも、そうする事で寒々しい自らの身と心がほのかに温まるのを感じ、歪んだ大人になったもんだと自嘲した。

しかしこんな俺にだって穢れのない心を持った時代があったはず。そう、クリスマスと言うイベントを純粹に楽しんでいた時代がきつと有ったはずなのだ。

頭の中のアルバムをぺらぺらと捲っている内に、俺はもっと根本的な事が気になり始めた。そもそも俺はどんな子供だったのだろうか。

忙殺される日々が当たり前になっていた俺は、久しく仕事以外の事に頭を働かせる余裕が自分に有る事に気が付き、なんだかよく分からない高揚感を覚えていた。

『ボーイ・ミーツ・ガール』

ふと浮かんだのはその言葉。

言葉の意味を簡単に訳せば『男女が出会い恋に落ちる話』、『月並みな話』とも訳されるくらいに王道なその設定が、少年時代の俺は大好きだった。ある日突然空から可愛い女の子が降ってこないかと期待しながら、一晩中空を眺め続けた夜もあったくらいだ。

そんな何処にでもいる純粋な少年も、歳を取るにつれてやがて思い知る。『ボーイ・ミーツ・ガール』はフィクションでしか起こりえないのだと。可愛い女の子は空から降ってなんて来ないし、パンを啜って街中を全力疾走したりもしない。

夢物語は現実では起こらないから夢物語なのだ。

それから少年はそれなりに勉強をしてそれなりの成績でそれなりの学校に進学をした。それなりの女性とそれなりの数お付き合いました。誇れる程でも無いが卑下する程でもない人生を歩んできた結果、クリスマスを間近にイルミネーションを見て悪態を吐くような男性へと進化を遂げたのであった。

回顧録の結末は悲しい物であったが、現実なんてこんなものだ。叶わぬ夢など持たず分相応な人生を歩む事こそが幸福なんだと、そう結論付く頃にはイルミネーションはとっくに通り過ぎていて、残ったのは冬の到来を感じさせる冷え切った空気だけであった。

「……あーあ、美少女が空から降って来ないかなー」

ほんのちよつと前にあれだけ否定して見せた『ボーイ・ミーツ・ガール』を求める様な発言をする俺。この華麗なまでの手のひら返しをどうか責めないでほしい。そうせざるを得ないほど冬の独り身と言うのは辛く寂しい物なのだから。

誰に言い訳をしているのかも分からぬまま家路への足取りを早めて行く。何故かと言うと明日は土曜日で仕事が休みだと言う事に気が付いたからだ。どこかで酒とジャンクなつまみを買ってささやかなパーティーでも催せば、独り身の寂しさを少しは紛らわす事が出来るはずだ。

そう閃いた俺は目に付いたコンビニで宴の準備を済ませ自宅を目指した。1人呑みをするなんて一体いつ以来だろうか、しかし今度は頭の中のアルバムを捲るような真似はしない。そんな事より一刻も早く家に帰って酒が飲みたいのだ。

そうしてようやくやくたどり着いた我が家、どこにでもある平凡なアパートの二階に位置する自分の部屋へと続く階段を駆け上がって行く。部屋の前まで来た俺はカバンの中から家のカギを取り出そうとした。

その時だった……

「こりゃ！どかんか無礼者！！」

突然怒鳴り声が聞こえた。年老いた男の声、それも結構近くからだ。辺りを見回してみるが俺以外には誰もいない。不思議に思いつつも空耳かと思いい俺は再び自宅のカギを……

「足元！あーしーもーと！！」

再び聞こえた声の言う通りに足元を見てみる。そこにはおよそ30cmの白くてフワフワした何かの有って、どうやら俺はそれを踏んづけていたようだった。早く部屋に入りたい一心だった俺は『ソレ』を踏んづけていた事に全く気が付かなかったのだ。

いや待てよ、俺がこの足元の物体を踏んづけていたのは良いとして、さっきの声の主は一体何処に？

「いや考え事する前に足をどかさんかい！バカか貴様は！！」

「……え？」

申し遅れたが、俺の名前は小牧健太郎（こまきけんたろう）29歳、ちよつとひねくれているが何処にでも居る平凡なサラリーマンだ。

そんな俺が、30cm程の変な物体と遭遇したお話。題して『ボーイ・ミーツ・ヘンナノ』これより本編スタートです。

振り下ろされなかつた手斧

五島 夏樹

私は幼い頃、父を亡くしたにもかかわらず、とても繊細で気性の優しい子供というので評判だった。母は勿論、すぐ近くに住む伯母もつねに私のおとなしさを愛でて可愛がってくれた。ただ学友のなかには、私の優しさを弱さとしていじめの対象にする者たちもいたが、かえって私の反抗にあつてしばしば痛い目に遭うことになった。なぜなら、私、西條昌弘、の優しさの底には鋭い棘のある固い芯があることに、彼らは気づかなかつたのだ。

また私が動物を好きなのを知った母が、さまざまな愛玩動物……犬や猫やその他の小動物をふんだんに与えてくれ、そうした動物たちといつも遊んでいた。餌をやったり、愛撫したりするときほど楽しいことはなかつた。こうした気性は大人になつてからも変わることはなく、これら動物たちの私に対する献身的ともいえる愛情には、いわゆる「人間」たちの、うわべをつくろつた友情や底の浅い愛情などは比べものにならないほど、私の心に訴えかけてくるのだった。

そして二十五歳になつた時に、私は結城雅子と結婚したが、その妻にも自分と同じ気性……つまり生き物をこよなく可愛がるのを見て、私は満足だった。

そうした妻との生活に私はこのうえない幸せを感じると共に、自分の前に開けている明るい将来を信じたのだ。しかし、そうしたおり、ある夜、まさに運命的ともいえるひとつの『出会い』が待ちうけていたのである。相手は一匹の猫だった。

金曜日の夕方、私が会社から帰宅すると、玄関の横の暗がり、なにやら真つ白いふんわりとした柔らかいものが横たわっているのを見て思わず足を止めた。よくみると、それは一匹の大きなペルシャ猫だった。猫は私の姿を見るなり身を起すと、甘えた鳴き声をたてながら、背を丸めて私の脚に身体をすり寄せてきた。一瞬、どこかよその家の飼い猫か、野良猫が迷い込んできたのでは？と思ひ、「しーっ、しーっ」と追ひ払おうとしたが、その猫は私を見上げながら「にゃーお、にゃーお」と囁くように鳴きながら、脚にまとわりついて離れようとしななのだ。私は思わずその可憐さに身をかがめて抱き上げずにはいられなかつた。

その猫は、身体全体を純白の長い毛でふさふさと覆われたとても美しく大きな猫で、金色に光る伶俐な感性を湛えた大きな瞳の透き通るような輝きが私の心を捉えて離さなかつた。

以来、その猫（雌猫だった）は私の、そして妻の最も愛する家族の一員となつたのである。

「シロー」……これは妻がつけた名だった。まさにその純白の毛色からつけたものにちがいない。以来、そのシローは私の愛猫であり、また遊び友達となつた。この猫に餌をやるのは私にかぎられていて、私の行く先々どこでも家じゅうついて

まわった。外出の時などは、あとを追ってくるシローを追い払うのに、心ならずも声を荒げて叱らねばならなかった。私は子供の頃と同じように、その猫に夢中になった。猫も私が家にいる間はそばを離れようとはしなかった。

私と愛猫のそうした情愛は何年かの間続いたが、やがて、私の陥った「飲酒癖」という悪行のせいでも、がらりと私の性格が変わってしまった。日を追うごとに私は気難しくなり、ささいなことで声を荒げて猫を叱るようになったのはもちろん、周りの者たちの気持ちにも無頓着になっただけではなく、すでに妊娠中の妻に対してさえも心無い言葉を浴びせかけるようになり、ついには手をあげるようにさえなっていた。そんなとき、よく家へ遊びに来ていた伯母が、わたしと妻の間に入って、必死になって止めてくれた。

そうした私の行状や妻との諍いを見かねたのだろう：：ある日、伯母は私の知らない「父親」について詳しく話してくれた。それによると：：：普段から深酒に溺れていた気性の荒い父は私が生まれたばかりの頃、突然狂ったようになって人と争ったあげく瀕死の重傷を負わせて警察に収容された後、精神病院に移送された。が、間もなく首をつって死んだのだ、という：：：。

そうした悲惨な出来事はこれまで周囲の者達はむろんのこと、特に息子の私には秘密に伏され、母と伯母以外には知る者は誰もいなかった。しかし、近頃の私の行状を見て案じていた伯母は、その事実を私に告げて、決して父親の轍を踏まないよう、そしてつねに心を平静に保ち自分の人生を大事に生きていくよう、涙ながらに切々と訴えたのだった。

そうした父親の悲劇を知った私は、その日以来、「飲酒癖」や自分の行いを深く反省するようになった。そして間もなく生まれた息子（健太）への愛が私を変えていった。妻と息子と自分、親子三人の睦まじい生活が始まった。そして六か月が経った。可愛いさかりの息子との日々には私はこのうえない幸せを感じていた。一方、私の猫への愛情は次第に薄れていった。そして、猫の私への慕いよる気持ちから脚にじゃれついたり、まとわりつくのを厭わしくおもうようにさえなった。さらにその「みゃーお、みゃーお」と鳴く甘え声にも苛立ちさえおぼえていた。そうした折、ある一つの事件が起こった。

若い息子を抱いて二階から下りているとき、横から忍びよってきた猫に足をからまれ、危うく階段を踏み外しそうになった。猫のシローとしてはただ私に甘えたいための行動だったのだろうが：：：あるいは息子を愛するあまり、自分をかまわなくなかった私への性急な催促の念からとも言えるかもしれないが：：：私は階下へ降りるなり、苛立ちと怒りにまかせて足元をうろつく猫を思いっきり蹴飛ばしてしまった。廊下を吹っ飛んでいった猫は壁にぶち当たると、「ぎゃっ」と一声叫ぶなりぐったりと廊下に横たわったまま動かなくなった。私は息子をベッドへ寝かすと、慌てて廊下の隅に横たわる猫に近づき、そ

の様子をみようとして首に手をかけると、猫は怯えたようにいきなり歯をむき出して私の手に噛みつく、あつというまに逃げていった。以前はあれほどの私を愛した猫がこんなにはつきりと敵意を示し、自分を怖れ嫌うのを見て、私はいささか悲しく思った。まだいくらかは昔の私の気性が残っていたのだ。しかし、こうした気持ちもやがて「癩癩」というわがままな悪癖に変わっていった。時や場所をかまわず、己の胸にとぐろを巻いている癩癩をまき散らしていた。

怯えて私に近づかなくなった猫はもちろんのこと、愛する妻にさえも、私はささいなことでも癩癩をぶつけるようになった。ただ幼い息子だけは別だった。ベビー・ベッドに寝ている可憐なその姿をちらっと見るだけで、私の心はおだやかな情に溢れ、いいよりのない愛しさに満ちるのだった。

ただ、最近になって、その息子に気がかりな病があるのがわかった。睡眠中に時折、呼吸が途切れているのを見て、妻も私も驚いて子供をゆすって起すことがあった。

リ・インカネーション

仲野
識

2034年3月1日

「社外秘資料」上長宛

筆責 仲野識

リ・インカネーション実例報告

表題の件について、下記のようにご報告申し上げます。

1・検出ケース数 三

2・日時 CASE1 一九六〇年 冬

CASE2 一九九八年 春

CASE3 二〇一七年 夏

3・場所：リ・インカネーション実施室B

4・対象者：八槇雅治（ヤマキマサハル）

飯坂 彩野（イイザカアヤノ）

本井慧（モトイサトシ）

梶木比奈子（カジキヒナコ）

5・目的：リ・インカネーションシステムの機能解明とシステム汎用導入に際するリスクマネジメント

6・所見

今回の打ち合わせには開発部も同行することから、管理システムの受注がその場で決まりそうであれば、その開発スケジュールも立てる必要がある。リ・インカネーションについての詳細な説明も必要。輪廻転生、生まれ変わり等の簡潔な言葉にて行うこと。

7・添付資料

CASE1～3までの詳細な記録。必ず目を通してください。

以上

ちゅん、ちゅん——雀が鳴いている。開け放した格子窓から見える青い空。雲が流れている。雪が積もり、一面を銀色に染め上げていた。嗚呼。今日も平和だ。僕は微睡みの底から、其の様を見上げていた。

藍色の羽織から覗く日に焼け無い腕は白く、異人の如くな灰色の髪は緩くうねっている。傍の小机の上から、銀縁の眼鏡を取って其れを掛けようと、引出しに手を伸ばした。

ぱた、ぱた——足音がする。引き戸がゆつくりと開かれ、部屋に入ってきたのは背が高く可憐な少女。漆黒の着物に散る長い黒髪は右上で結わえられ、桜を模した簪が煌めく。大きな瞳は闇の色。

「御主人様、開店の時間で御座います」

「ああ」

其の、可憐で赤く艶めく唇から漏れる洗練された言葉。僕は満足して微笑み、ひんやりと冷たい彼女の頬に触れた。

「雛（ひな）。お早う」

「お早う御座います、御主人様。雛は嬉しゅう御座います」

雛は、其の俤一礼すると部屋を出て行った。寸分乱れる事の無い歩幅。僕は一つ溜息を落とし、布団を払い除け、漸くという形、畳の上に胡坐を掻いた。乱れた髪を撫で、体裁を整えながら僕は雛を見遣った。

今日は晴天。外に出るには、良い天気だ。

僕は雛の出で行った扉を閉めず、流れる空気に笑みを浮かべて、仕事の待つ部屋に行くべく準備を始めた。

僕、慧（もとい けい）はこの本井家に雛と二人で住んでいる。広くも無いが、狭くも無い木造の家。この町では中の下といった佇まい。僕はこの家を気に入っていた。

僕の仕事は、人形技師。注文を受けて作る事もあれば、僕の気の向くままに制作する事もある。大きな人形から、小さな人形まで。絡繰人形や、非可動式人形まで。何でも請け負う。其の代り、其の人形に見合った報酬は貰っている。人形作りには、金と手間が掛るのだ。しかし、おかげで、僕はこの業界では随分と名を上げる事が出来ている。其れも、助手である雛の力が大きい。

雛は、僕の作った最高傑作だ。音声を認識する装置、全可動式の手足、絡繰起動式で、内部の部品が壊れるまで、半永久的に動く事が出来る体。内部の装置の熱で、僅かながら温度を感じる事も出来る。雛以上の人形は、

此の世に一つと無いだろう。

店に続く暖簾を潜ると開けるのは、明るいいつもの風景。

硝子の間の木格子で出来た引き戸の隙間から漏れる朝の光。人形の陳列する机。棚。そうして、僕の机の隣に置かれた、僕特製の細かな細工をしてある、真ッ赤な漆塗りの椅子に腰掛ける雛。

ごーん、壁に掛けられた振り時計が僅か間の抜けた様な音を鳴らす。

「さて、今日も店開きだ」

十一時に店開きをし、夕方五時には閉めてしまう。此の日もそうだった。僕の人は、いつも作った其の日の内に、すぐさま売れてしまう。売上金を持って、雛が材料の調達に行く。其れが僕らの常。

閉店間近に、積もる雪の中夕暮れの蜜に溶ける様に表れたのは、やはり常連の男だった。すらりと長い身体を揺らして、暖簾を潜る。

「やあ、主人。良い物は入ったかな」

「さてねえ。貴方の気に入る物が在るかどうか。でも此処は、出逢いの人形屋だからね。貴方が惹かれるものも、在るかも知れ無い」

僕は笑顔でそう言った。僕は彼の名を知ら無い。彼は僕の名を知ら無い。知っているのは、互いの顔と、声。唯、其れだけ。

男は何時も、蜜色の髪と、琥珀の瞳を隠すように、真ッ黒な衣装を身に纏っていた。町を歩けばさぞや目立つだろう。僕は初めて遇った時そう言った。男は笑って、いいや、と言う。世も末だと僕が笑った。二人はそうやって知り合った。

「君の可愛いお人形は、元気かな」

「嗚呼、相変わらず、美しいよ」

「其れは何より」

男は棚に並ぶ、小さな人形やら、装飾品やら、古ぼけた目玉やらを物色しながら、言う。僕は男の背に語り掛けた。

些か皮肉交じりの笑みを其の端正な顔に浮かべて、男は言った。

しんしんと、雪が降って居る。

「しかし、君の人形は、本当に良く出来ている。あれは、売値にすれば幾らになるのだろう。引き取り手は、引く手数多では無いのか？」

「あれは売り物じゃ無いんだよ」

「そうかい」

「あれはね、僕の生きて行く総てなんだ。二度は作れ無い。もう二度と。彼女は生まれ無いのさ」

「君の其れは、束縛なのだろうか？」

「さあ、どうだろうね？　少なくとも――世の中が言う、愛情とは、大分掛離れて仕舞った様には思っただけだ」
僕は笑った。そうかも知れないと思っただけだ。束縛。そうかもしれない。僕は、彼女を縛り付けて居るのかも知れない。

「では、私の依頼も受けてくれるだろうか」

「勿論だとも」

「これを、作って頂きたい」

「一週間」

一つの包みを受け取り、僕の言葉はゆっくりと空気を揺らした。男は皮肉を引ッ込め、薄く笑った。帰るとしよう、そう言い捨てて、男は硝子戸の奥の闇に消えて行った。

ヴ
イ
ー
ナ
ス
・
ヴ
イ
ー
ナ
ス

古池 真透

「エレベーター、と言ったかしら？」

ジェーンは、斜め上に向かって幾重にも流れ行くステップと、その両脇を滑るように動く濃い目のオレンジ色のベルトを観て、少し眉を下げて呆れたように見えた。

ボクの後ろに人は並んでいなかったし、店内のBGMもちょうどよい音量だったから、ひとまず踏みとどまってみた。「そうだけど。ジェーンの住む場所には、もう、こういうのはないかもね」

ボクは、身長はそれほど大きくないし、スポーツも人並み程度の大学一年生だけれど、女の子の扱いは慎重な方だと思っているから、ジェーンの疑問には真摯に向き合うと決めている。

「このエレベーターは、つまり、物体を移動させるために機械的に固定された軌道上のベルトに乗せて目的地、しかも、それはそれほど遠くない場所まで、ゆっくりと動かしていくマシン、ということでしょうか？」

ジェーンは、そう言うのとボクの返答も待たずに躊躇う素振りも見せず、足元のステップに右足から一步踏み出し、上の階に向かう流れに乗った。

「難しく言えばそうかな」

ボクは相変わらずなジェーンの芸術的と譬える以外にどう表現しようかと迷う程の妖艶な腰つきを見上げながら答えた。「でも、そういう原始的な部分を咎めたりはしないから安心しなさいな」

「原始的、ねえ」

ブロンドと言うには、腰まである長い髪はその金色は明るすぎて、文字通り黄金のように煌めいているし、首から下のボデイラインにフィットしたエナメル系の全身レオタードのような紅いスーツは、露出は少ないもののセクシーさの気づかいをボクのほうがしてしまうような体形だった。

後ろ姿もそうなのだから、前から見た姿は殿方ならず売り場のパートのおばさんたちも息を飲んでるのがわかる。

その抜群なスタイルは、正社員らしき説明員のお兄さんも、すれ違いざまに一瞬立ち止まってしまふことを誰も注意できないだろう。

かと言って、ジェーンは、ボクを誘惑しているわけではない。ボクだって立派な男だから、初対面の数分は戸惑いもあった。ただ、その出会いのシチュエーションは、容姿がどうあっても、好意を寄せるには誰人も臆するに違いなかった。

でも、ジェーンと付き合い始めて——あくまで「人」付き合いという意味で——やはり、彼女は悪い「人物」ではないと

いうことはわかってきた。と思う。

見た目の年齢は二十歳くらいだけれど、外国人はあまりいない街でもあり、ジェーンのような女性が闊歩していれば、海外から観光にやってきたのかと思われるような土地柄だ。

一方で、観光地としての産業なんてこれっぽっちも見当たらない街だから、きちんとした商業的な宿泊施設がない。これは時に由々しき問題なのだけれど、それは置いておいて、そういう状態だから、外国人が街にいるということは、どこかの家にホームステイしているのだという想像をするのが、この街の感覚だ。

それが、超モデル級の美女である。

もし、ボクの街にミスマツチランキングで表彰されるような式典があれば、ジェーンは間違いなく第一位で表彰台に立つことだろう。

何を大げさなことをと思われましたか？

全然、大げさではありません。

あなたも、きつと、そんな馬鹿なお思いになるに違いない。

なぜかと言うと、ジェーンは、まず、日本人であるわけでもなく、海外からの旅行者でもない。いや、旅行者という意味ではそうかもしれない。

初対面の方々に説明するのは骨が折れるのだけれど、それを言うと、二一世紀も二〇年経過した宇宙関連の学問や観測結果からして、毎度笑われる。というか失笑される。

でも、それ以外に説明しようがないし、事実らしいのだから仕方がない。

よって、臆面もなく正々堂々とボクは言うのだ。

ジェーンは金星人であると。

いま、アナタも、ハア？という表情をしましたね。

わかっていきます。

気にしません。

きつと運命の人

三
カ
月
一
月

ラグビーの試合を観てる。ルールなんてわからないけど。

試合といっても紅白戦。二軍一軍で分かれているのか、それとも均等になるように分けられているのかはわからない。どちらとも真剣にやっているというのには伝わってくる。時折作戦を確認したりしているのか試合が止まって、顔は知っている程度の先生の怒声が聞こえることもある。

目を細めたくなる青空に、名前も知らない連中の声が響く。グラウンドは本来サッカー部と半分ずつ使用しているが、週に一回、全面を使って練習する日があつて、昨日はサッカー部が全面を使って練習をしていた。ラグビー部は隅の方でパスやタックルの練習をしていた。今日はサッカー部がパスやフットワークの練習をしている。

どうでもいいんだけどね、そんなこと。

僕が見ているのはラグビー部ではあるけれど、むき苦しい男たちの熱い練習風景ではない。高い声を張り上げて、何やら書き込みをしつつ彼らのサポートをしているマネージャーの方だ。

三人いるが、その中でも僕はひとりはずっと追っている。日焼けをしている選手たちよりも肌が黒くて、肩より長い髪を三つ編みおさげにしている彼女。学校指定のジャージはいつでも清潔感を漂わせている。着る機会があまりない僕のものとは比べても大差ないくらいだ。

放課後は、楠木奏さんを見守るのが僕の日課。自分でもなかなか気持ち悪いとは思うけど。

でも僕にはこれくらいしかできない。だからいいじゃないかと開き直るわけでもないけれど、彼女やその友達がキモイマジやめとか言ってくるまでは続けさせてほしい。クラスは三年間一度も同じクラスにならなかったし、選択授業はかすりもせず、彼女は電車通学で僕は徒歩。委員会も実益を兼ねて保健委員会しか選べない僕には、彼女が同じ委員会を選んでくれることを祈るしかなかったけど、届きはしなかった。

だからこれを不許可とされてしまうと、もう僕にはどうしようもない。保健室の窓から彼女の可憐な姿を網膜に焼き付けてるだけだから、どうか御慈悲を。

「君も飽きないね」

「日課ですからね」

「むつつりスケベだ」

「いや、ほぼストーカーかと」

「自分で言うかね」

養護教諭の田村先生は、苦笑いを隠さない。その苦さを珈琲へと変えて、僕に差し出して来る。ブラックは苦手だと知っていてブラックをわたしてくる。さっさと帰れという意味と「さっさと帰りな」という言葉をそえて。対策として僕はステイックシュガーとマイマドラーを常備している。我慢して飲んで、ブラックが飲めるようになったらかつこよかったかもしれないと、少しだけ、思ってる。

甘くした珈琲をすすする。この甘さと苦さが混じり合っている感じが結構好きだから、たぶん僕は一生ブラックは飲めないと確信している。これは僕の恋の味なんだ、なんてね。

「話しかけてみたらいいのに」

「運動部のマネージャーをしている人に虚弱の僕が？」

「卑屈だなあ」

「釣り合いの話ですよ」

「釣り合わせる努力をしてみたまえ若者よ」

「……ああすいません一瞬意識が」

「軟弱者」

「言わないでください」

きつと、話すことはできる。話してしまえば結構簡単に。何度も脳内でシミュレーションは重ねているし、人見知りする方ではない。ジョークを交えたトークなんでもは無理だけど、二言以上は会話できるはずだ。

それなのに彼女に話しかける勇気がわからないのは、我ながらどうしてなんでしょう神様。僕が虚弱な理由と一緒に教えてください一四〇字以内で。

もう三年生になってしまい、受験も始まる。ストーカーまがいのことをしているけれど、本物になるほど根性も素質も妄想力もないから、彼女の進学先がどこなのか、そもそも進学するのかどうかも知らない。きつとこのまま卒業を迎えて、この恋心も、いつしか思い出になっていくんだ。綺麗に美化されて。事実と違うことなんかも付与されるかもしれない。